

ISSN 0911-5587

楷

岡山大学附属図書館報

OKAYAMA UNIVERSITY
LIBRARY BULLETIN

NO. 17

1993
MARCH

特集号

池田家文庫藩政史料

マイクロ化事業完成記念

岡山大学附属図書館所蔵



「池田家文庫」マイクロ化事業の 完成に当たって

高橋 克明
岡山大学長

岡山大学は、附属図書館が所蔵する貴重史料群「池田家文庫」の主要部分の藩政史料約6万点のマイクロ化事業を、丸善・富士写真フィルム両社の協力を得て、平成2年8月以来進めて来ておりましたが、昨年12月に総ての撮影作業を完了することができました。また、マイクロ版史料目録も近々完成の予定となっております。

池田家文庫は、岡山藩の初代藩主池田光政の入府以来、廃藩置県に至るまでの約240年にわたる我が国幕藩体制史に関する第一級の史料として、学術的価値の高さは自他ともに認められております。それだけに、早くから公開利用に供してきていることもあって、年を経るにしたがって、また利用の頻度があがるにしたがって、史料の劣化と損耗が大きな問題となってきました。

この度のマイクロ化は今日の先進技術により、新しいメディアによるデータベース化を図ったもので、何よりもまず日常的利用がきわめて便利になるのみならず、貴重な資料の永久保存が図られるというメリットをもたらすという点で、まさに画期的な事業と申すことができます。

さらに、光ディスクその他への変換も容易になること、および国内、国外を問わず多くの研究者に対し活用の道が開かれること等、開かれた大学という観点からも大きな意義を有するものであると考えております。

実際の作業の遂行面では、綿密、細心の取り扱いのもとより、多くの補修等も必要で、撮影コマ数は約200万に達しましたが、産学の関係者の長期にわたる地道な努力に頭が下がる思いであります。

本事業の完成により、その成果が内外に広く活用され、学術研究上格段の進展がもたらされることを当然期待したいと思いますが、それだけに原史料を保存する本学における、この分野の研究に一層の拍車がかげられ、大きな成果が得られることを願ってやまぬ次第であります。

萬 成 勲
附属図書館長

平成2年8月より進めて参りました池田家文庫マイクロ化事業の主要な部分であるマイクロ変換作業が昨年12月にその完成をみ、今後目録の整備という作業を一部残しておりますけれども、これによりこの事業は一応の完成をみたわけであり、製作に当たられた丸善株式会社、技術提供をいただいた富士写真フィルム株式会社、並びに細心の注意を払われマイクロ変換作業に携わって来られた方々のご熱意ご努力に敬意を表し、心より感謝申し上げます。今回の事業は国立国会図書館所蔵「明治期刊行図書」のマイクロ化事業に続く本格的な大型の事業であります。

今回のマイクロ版によりこの分野の研究が一段と進展することを願うとともに、さらには諸外国にもこのマイクロ版が頒布され、これを契機として日本の社会・文化といった研究が歴史的視点を踏まえて進展し、ひいては日本の理解の深化の一助にもなればと願っているところであります。

今後、マイクロ版により池田家文庫へのアクセスはより容易となり、従来にもまして利用が増加してくるものと考えます。この面で、高いレベルでのサービスの継続は本図書館に課せられた責務と考え、一層の努力が必要と肝に銘じているところであります。

今回、マイクロ化により保存と利用というやや相反することを両立させることができたわけで、その意義はまことに大きいものがあります。さらには、マイクロ変換（撮影）に際して、原史料の一斉点検が行えたことになり、従来、虫損・水濡れなどにより通常は閲覧出来なかった史料部分に補修が施され、原史料そのものについても保存と利用の面で新しい息吹が与えられたことになり、まことに意義深いものと存じております。

最後に、今回のマイクロ化事業に当たって、文部省をはじめ、本学事務局並びに関係各位の暖かいご理解とご援助をいただき、心より感謝申し上げます。

定 兼 範 明

前附属図書館長

古文書類を保有する図書館の最大の悩みは、保存と利用という矛盾する機能を、いかにして両立させるかにある。

特に池田家文庫は、幕藩体制研究に不可決の第一級の大型資料であり、年間千名を超える利用者のため、その損耗は著しいものがあった。図書館としては、その対策として、数年来、補修とマイクロ化に努力してきたが、予算的制約と対象資料が膨大であるため、遅々として進まず、完成には約百年を要すると試算され、苦慮していた。

ところが平成元年9月に、丸善株式会社からその文化事業の一環として、池田家文庫をマイクロ化し、国内はもとより、広く海外にも頒布したいとの申し入れがあった。図書館としては、干天に慈雨の一大朗報であり、直ちに前向きに検討することを決断した。

以後、丸善と協議を重ねて、大学側負担経費など種々の問題点を洗い上げ、一応の目処を立てるのに約半年を費やした。そして、池田家文庫等特殊文庫委員会を中心に、高橋学長・文部省学術情報課・岡大事務局池田家など各方面にご相談したところ、幸いにも、深いご理解とご援助の約束をいただくことができた。

平成2年8月30日、高橋学長や丸善・富士フィルムの両社長などを迎えて、図書館で行ったマイクロ化企画発表の記者会見、また同日夕方、産・官・学の各界から多数の来賓を迎えて、岡山国際ホテルで開催した企画発表会の模様が、つい先日のことのように思い出される。これで一段落ついたという安堵感と、大学側が負担する多額の補修費の調達などが、企画通りに進むだろうかという不安感の入り交じった複雑な心境であったように思う。

幸いにも各方面の温かいご援助と図書館を挙げてのご努力によって、予定通りマイクロ化事業の撮影が完了したことは企画に腐心した者の一人としてこの上ない喜びであり、関係者各位に対し、心からお礼を申し上げる次第である。

白 石 信 雄

丸善ニューメディア部次長

準備段階の想定が、実行段階で修正を迫られた問題は、大きく言えば、①解体補修を要する史料の予想以上の量とその難作業
②目録改訂作業、いわゆる「平成の大整理」のクローズアップ
の2点と言えるでしょう。

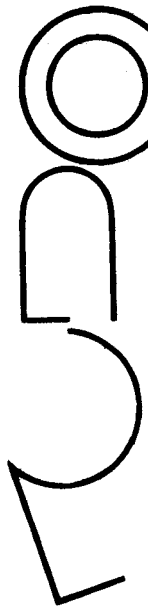
「コスト」と「完成品の精度」を睨みながら、資本保存事業と出版事業の整合性をはかってきた私共にとって、大学側の要請する「目録データ改善の必要性」は、マイクロ出版とのタイミングの点で、社内的には深刻な論議を惹起したことを告白しなければなりません。

とはいえ創業以来、情報流通をもって任じてきた弊社が、古文書書誌情報の標準化に一役買うに違いない今回の画期を、企業論理の一面をふりかざして無視するわけにはいかなかったことも論をまたないところであります。

こうした諸問題の継起にもかかわらず、ほぼスケジュール通りに撮影が完了した要因の第一は、大学当局、図書館関係者は勿論のこと、前準備、補修、撮影に携わったすべての「人々」の熱意が、「共同事業」として結集できたことに尽きるでしょう。

私は今、早稲田大学からいただいた「岡山藩研究会名簿」を見えています。そのメンバーの拡がりには、首都圏はもとより遠く愛知、福島、秋田に及び、しかも所属機関は大学のみならず、博物館、自治体の社会教育課に至っています。そして、何よりも50人になんなんとするその多くが大学院生である事実に感銘を覚えるのです。若い世代が、面目一新した目録とテキストの解説を通して、新しい近世社会像を析出できるとすれば、私たちの努力は充分報われるでありましょう。

マイクロ化完成記念特集号の発刊に当たり、関係各位の並々ならぬ御協力と御厚意に対して、改めて心から感謝を申し上げる次第です。



図書館人の夢

矢野光雄
元附属図書館事務部長

「いつでも、どこでも、だれにでも」必要な資料が迅速的確に提供できる図書館。それは非常に優れた図書館です。図書館に身をおき、図書館の仕事に携わった人なら、それが図書館人の夢となっていることがわかるでしょう。言葉でいうことはいとも容易ですが、これを図書館という組織の中で、具体的な姿として表すのは大変困難なことです。人の問題、金の問題、施設設備から労務管理に至るまで、大小さまざまな問題が絡んでくるからです。

大学の図書館は、大学という組織の中で、一体何をなすべきなのでしょう。そのことは在任中常に私の課題でした。その課題をできるだけ明確にし、策を講じようとしたのが、赴任先における「整備充実計画」でした。岡大の場合、池田家文庫はその計画の中では保存問題として捉え、具体的には古文献の補修とマイクロ化計画の推進というかたちで対策が図られています。

池田家文庫マイクロ化の話が丸善側から持ち込まれたのは、丁度この「整備充実計画」が『図書館概要』で公表されて間もない頃でした。丸善ニューメディア部の提案とその着想には大きな魅力があり説得力のあるものでした。すでに国立国会図書館の明治期刊行図書約16万冊の資料を、富士フィルムをパートナーに、マイクロ化事業の実績をもっていたからでしょうか。マイクロ化に対する考え方、古文書・記録類の取扱い方、マイクロ化事業工程、保全対策、実施マニュアル等々、更には実施に際しての課題にまで及ぶものでした。

しかし、岡大図書館には企業サイドとはまた異なる問題がありました。池田家文庫のような大部史料を企業の協力を得て具体化した例は、国立大学には前例がなく、新たな環境づくりが必要でした。岡大図書館では、昭和45年に『池田家文庫総目録』を刊行しています。そのこともあって、同文庫の利用者は年平均約千人、1万点にも達していました。利用の大部分は複写によるもので、利用者はカメラ持参で全国各地から訪れています。史料は門外不出、ゼロックス複写お断りなど、来館者には保存対策上の利用制限があり、カメラ撮影にも担当職員の見守りが必要でなければなりません。ここでは史料を動かさず、利用者自身が移動しなければ史料へのアクセスはできません。

図書館はいま、資源は共有との考え方に立ち、ストックからフローへの時代にあります。しかし保存を考えればこれとて致し方ないことです。それでも図書館人の夢、「いつでも、どこでも…」が脳裏をかすめます。学術情報の効果的利用を保証することが図書館本来の役割と思うからです。

いくつかのプロセスを経てマイクロ化事業計画の提案受入れの検討を開始しました。民活導入、原史料の保存計画、メディア変換による提供サービスの可能性、所蔵史料の再開発などの視点から保存と利用を核に、学内外の利用者、図書館の事務処理能力を考えつつ、図書館事務サイドで叩き台が作られ、関係機関への打診、説明、実現への方策が図られました。

新しくことをなすとき、難題はつきものです。今から思えば、文部省をはじめ、関係機関の感触は、案じながらも好感のもてるものでした。それにもまして当時の館長定兼先生の決断に敬意を表するものです。私には忘れられない一つでした。

平成2年4月、私は東北大学へ勤務となり、狩野文庫のマイクロ化事業を進める機会に恵まれました。考え方は池田家文庫の場合と同様、学術資料の保存と利用をテーマに、とかくサービス上の対立概念となりやすい両者を、両立概念に導く具体的施策として位置付けたスタートでした。

二つのマイクロ化事業に直接関与した一人として、私はこう考えます。

第1に、図書館のマイクロ化は、利用をより容易にするためのもの、保存とは適切な資料利用環境を整えることです。保存は、資料の原形を保持すると共に、そこに内包されている情報を利用提供するための図書館サービス技術と考えるべきでしょう。

第2に、事業の遂行には、それに必要な実行組織をつくる工夫が必要です。人手不足で容易ではありませんが、既存組織の活性化が期待できます。

第3は、マイクロ化対象資料について専門知識をもった人が必要です。索引・目録の作成はマイクロ化には不可欠です。岡大・東北大で今回、マイクロ化に踏み切れたのは、それぞれの図書館にその専門家がいたからです。

第4は企業側の協力に負うところ大ですが、マイクロ化による利用の拡大は、これまでの情報からみても十分に可能と思われます。マイクロ製品の活用は複写サービスの円滑化につながるものです。複製出版、マイクロ出版など、図書館は社会の要請を見極めながら、所蔵資料の再開発を図り、窓口ばかりではなく、外部の流通機構をも介する新たな情報提供手段を考える必要があるでしょう。一つの夢の実現は、新たな夢を育みます。

池田家文庫マイクロ化事業の歩み

平成元 1989	9.12	丸善から池田家文庫マイクロ化計画申し入れ
	12.18	丸善から池田家文庫マイクロ化願書をもって正式申し入れ
	12.27	池田家文庫等特殊文庫委員会（申請受入れ議決）
平成2 1990	1.12	丸善へ館長名をもって提案受入れの回答
	3.7	丸善から『池田家文庫のマイクロ化要領』提出
平成3 1991	5.17	池田家文庫等特殊文庫委員会（古文書・記録類マイクロ化計画議決）
	5.22	撮影トライアル実施（5.22～5.25）
	6.22	丸善から『池田家文庫トライアル結果報告』提出
	8.20	池田家文庫マイクロフィルム版複製・頒布の契約を締結
	8.30	岡山大学所蔵池田家文庫マイクロ化事業記者会見（於附属図書館） 池田家文庫マイクロ化コンバージョンセンター開所式（於附属図書館） 岡山大学所蔵池田家文庫マイクロ化事業企画発表会（於岡山国際ホテル）
	9.26	池田家文庫マイクロ化実務打合わせ会（作業マニュアルほか）
	11.1	池田家文庫マイクロ化実務打合わせ会（補修取扱い要領ほか）
	12.14	池田家文庫マイクロ化実務打合わせ会（目録照合整理作業要領ほか）
	1.18	池田家文庫マイクロ化実務打合わせ会（目録修正カード様式ほか）
	1.24	池田家文庫等特殊文庫委員会（人権にかかわる史料の取扱いほか）
	3.22	池田家文庫マイクロ化実務打合わせ会（目録修正カードの改訂ほか）
平成4 1992	4.8	撮影コマ数50万コマ達成
	9.3	池田家文庫マイクロ化実務打合わせ会（目録再構築作業）
	10.16	池田家文庫等特殊文庫委員会（改訂増補版目録作成事業ほか）
	10.22	撮影コマ数100万コマ達成
	11.13	池田家文庫マイクロ化第1期頒布記者発表会（於岡山国際ホテル）
	2.27	『改訂増補池田家文庫マイクロ版史料目録 総記』発行
	2.28	第1期分マイクロフィルム（ポジ）受け入れ（マスター 5.11）
	3.2	マイクロリーダープリンタ（FDIP6000）納入
	3.3	『池田家文庫マイクロ版史料目録』、「法制」「行政」発行
	3.18	池田家文庫等特殊文庫委員会（閲覧・複写サービス開始ほか）
3.23	『池田家文庫藩政史料マイクロ版集成』利用開始	
3.31	『改訂増補池田家文庫マイクロ版史料目録 国事維新』発行	
平成5 1993	4.27	池田家文庫マイクロ化実務打合わせ会（目録再構築作業ほか）
	5.20	撮影コマ数150万コマ達成
	6.25	『池田家文庫マイクロ版史料目録』、「領地」「宗教」発行
	7.10	池田家文庫マイクロ化実務打合わせ会（改訂増補版目録作成事業ほか）
	7.17	『池田家文庫マイクロ版史料目録』、「財政」「産業」「社会」発行
	9.1	第2期分マイクロフィルム（ポジ）受け入れ（マスター 9.16）
	11.27	池田家文庫マイクロ化実務打合わせ会（改訂増補版目録作成事業ほか）
	11.30	『池田家文庫マイクロ版史料目録』、「軍事」「土木・建築」「交通・通信」 「教育・文化」発行
	12.15	第3期分マイクロフィルム受け入れ（ポジ、マスター）
	12.22	撮影完了
	12.24	池田家文庫マイクロ化コンバージョンセンター閉所式
	2.8	池田家文庫等特殊文庫委員会（撮影終了、「藩士」の目録刊行ほか）
	3.11	第4期分マイクロフィルム受け入れ（ポジ、マスター）
3.31	『改訂増補池田家文庫マイクロ版史料目録 藩士』（4分冊、2～4発行	
4.6	『池田家文庫マイクロ版史料目録』、「藩侯」「その他 支藩・家老家・岡山神社」発行	
5.	『改訂増補池田家文庫マイクロ版史料目録 藩士』（4分冊、1発行予定	



1,866,507駒・ 2,486リール完成への道程

岡本昌也
富士写真フィルム広報室課長

昨年末、池田家文庫のマイクロ化が終了したとの連絡を受けました。昨夏の社内の異動まで、検討期間も含め約3年余り、この画期的な事業のマイクロ化作業に携わった者の一人として、感慨無量でこの報告を聞きました。

今にして思えば、この事業は当社にとって、本当にチャレンジングで、また新しい課題を教えてくれた意義深い仕事でした。事業が具体化した時は、ちょうど国立国会図書館での「明治期刊行図書」のマイクロ化作業が軌道に乗った時期でもあり、大いにそのノウハウが活かされると思いこんでいました。

通常、この種の仕事のポイントは、「仕様・納期・予算・組織」の四点について、関係者との間で意見交換を実施、調整・合意を図り、ドメインを設定、スタートするのが、完全遂行への一般的なパターンです。

特に収録仕様の取決めは、納期・予算、また投入人員の選定に大きな影響を与えるため、開始後に変更することは極めてリスクイヤーな決断が伴うものです。そのため開始前の検討内容が、撮影技術を中心とした実作業以上に重要視されるわけです。

しかし、このプロジェクトに関しては実作業を着手した後に、今までの経験、体験がいかに拙いものであったかを、またこの種の仕事の中身には類型業務はあっても定型業務がないことを、つくづく思い知らされました。同時に、「質・量とも第一級の藩政史料を包括的にマイクロフィルムに変換、後世に伝承する！」とのコンセプトの重さを、真に痛感したのも偽らざる心境でした。

作業着手後、現状把握を中心に我々の事前の認識を越える難問題・新しい課題が発生、関係者間で再度コンセンサスを図る事態が生じました。今にして思えば、開始前に岡山大学関係者から、「刊本と古文書は違う！」との言葉を再三語って貰いながら、その言葉の背景、意味合いを理解できないまま、先入観をもってスタートした点に、全てが起因していると思います。

また事業コンセプト以上に、今後二度と復刻の機会が考えられない、この事業が背負っている宿命にも似た、「叫び」を感じざるを得なかったことも事実です。

作業開始後に変更した、種々の詳細な内容については省略しますが、当初の計画との相違点で特に強調したい点として①最初の計画では、単に収納されている順序で原本を撮影することになっていましたが、原史料の所在、発生場所を考慮した収録順序に変更した。②目録作成に関して、既存の総目録にマイクロアドレスを付与する単純な対称インデックス方式から、内容・年代・作者・宛先等のアイテムを付加した改訂増補版に変更した。この2点に集約されます。

このことは、完成されるマイクロ成果品を、より多くの人々に活用して貰うことを考慮した前向きな軌道修正でしたが、開始に際しての決定・制約事項もあるため、勇気を要する決断が求められました。特に、原本を事前に整理する段階で、より専門的な知識が求められるため、新たな人の投入が必至で深刻な問題でした。

しかし、これらの難問も、結果的には関係者の「この事業を成し遂げたい！」との強い思いと地元岡山の人々のこの事業への理解に支えられ、無事クリアすることができました。

終了した時点では、言葉でいえば簡単なことですが、この軌道修正は事業の正否が問われる内容でした。その客観的な評価は、既号で丸善の白石さんが国際日本文化研究センターの笠谷助教授の感想を紹介しておられる内容です。その言葉より、当初想定されていた以上の予期せぬ評価を得たことを強く認識した次第です。

また、この事業の完成に花を添えた出来事として長年、岡山大学の関係者が気に病んでおられた数冊の「留帳」が見つかり、岡山大学に寄贈されマイクロ版の「補遺」として追加されることになったとの朗報を聞きました。

このように、完成へのプロセスで、多くの出来事、葛藤、激励、ロマン等がありました。要するに、この事業は、多くの方々と「連帯と共感」によって完成されたものと、今更ながら思う次第です。

マイクロ化完成後の諸問題

森 岡 祐 二
附属図書館事務部長

三年間に及ぶ池田家文庫マイクロ化事業が完成した。

くしくも完成年度に当たる平成4年度に本学附属図書館に奉職しいくつかの貴重な体験ができたことは、筆者にとって大変光栄なことだと感じている。

この事業の意義をあらためて述べる必要はないと思われるが、過去の歴史的遺産ともいべきおびただしい古文書を、どのように後世に伝達してゆかかという一般的課題についての一つの解を提供したという意味で、この事業は大きな意義があると筆者は考えている。

さらに、コンバージョン・センターという作業場を中心として展開されたことに象徴されるように、この事業は単に書かれた内容に止まらず、それらがもつ独特の風合い等も含めて、マイクロイメージに視覚化するという貪欲な試みにも成功し（これらはひとえにこの事業に関係された各社の意欲と技術力に負うところが大きい）、さらにまた、それらの情報を統合的にデジタル化し、将来光ファイルへの蓄積、通信ネットワーク上での伝送への可能性をも残したことは、特記されるべきことであろう。

これらに加えて、マイクロ化事業と併行して実施されてきた『池田家文庫総目録』の改訂増補事業の意義についても触れなければならない。

この事業は、基本的目的としてはマイクロ版の利用の便を考慮して、その構成単位に沿った本版『総目録』の再構成と同時に、各文書ごとの内容をよりブレイクダウンするという点にあり、誠に骨の折れる作業でもあった。

これにより、マイクロ版池田家文書の検索が更に容易になるという本来の目的が達成されると同時に、図書館サービスの側面から見ても、同文書に関する利用者からの多種多様な照合・質問等に対しても、より迅速な対応が可能となることが期待される。改訂増補版は池田家文庫に関するいわばかけがえのないレファレンス・ツールとなることは疑いない。

以上、マイクロ化の完成に当たり、今後期待されるいくつかのポジティブな側面をとりあげた。しかしながらご他聞にもれず、この種のプロジェクトに伴う見通しのつかないやや深刻な問題を感じなかったわけではない。感想めくが、筆者なりにそのうちの主要なものを述べてみたい。

第1点は、全国の各図書館におけるマイクロ化が今後どのような方針のもとに展開されていくのだろうか、という見通しである。

全国的調整は果して可能なのか、財源は、等々池田家文庫の事例では古文書中心ということも関係して、マイクロ化に伴う補修費に限っても相当額に上った。

館界では周知のように、米国においてはすでに研究図書館グループ（Research Library Group）等を中心とした全国的調整に基づくマイクロ化による保存事業が連邦政府の財源によりスタートしていると聞く。今回のようないわば大半を民間資金に依存した事例においても、前述のような状況を考え合わせると、いろいろと考えさせられるが杞憂であろうか。

第2の点は、プロジェクトの推進体制と要員の問題である。国立98大学中、近世文書一般に範囲を広げても、中央館レベルで6万5千点もの史料を管理・運用している例は珍しいのではないか。決して自慢ではなく、これが岡山大学附属図書館の伝統的現実であり特殊性であるといえよう。

池田家文庫のうち岡山藩政史料が今回マイクロ化の対象となった中心部分であるが、上述した目録の改訂・増補作業に際しては、数万点に及ぶそれぞれの文書の記述内容を一点ずつ確認し、必要事項を目録上に記述するという緻密な作業が必要であった。こうした作業は図書館側で実施したが幸いにして献身的なスタッフ一同と研究者を含む周囲の協力によって、今回企画した分野については終焉を迎えつつある。

しかしながら、今後の運用・サービス面に関してこのような整理を継続できる要員の養成となると、残念ながら誠に心許無い限りである。

特に制度面でいわゆる行政職（一）という位置付けにあり、なおかつ古文書の読解力はもとより地方（じかた）文書等にもきわめて造詣の深い稀少な図書館員をどう処遇し、今後のサービスを維持していくのか、欧米で定着している専門員（curator）制度実現の可能性は将来にわたって皆無なのか、等々今後に残された課題に思いを巡らす昨今である。



池田家文庫マイクロ化事業概要

企画	岡山大学附属図書館 丸善株式会社
監修	岡山大学池田家文庫等特殊文庫委員会
撮影期間	平成2年8月31日～平成4年12月22日 2年4ヵ月(844日)
複製・頒布	丸善株式会社
撮影・編集・現像	代表責任者 富士写真フイルム株式会社
協力ラボ	日本マイクロ写真(株) 山陽放送サービス(株)
実行組織	池田家文庫マイクロ化ワーキンググループ 池田家文庫藩政史料マイクロ化実務打合わせ会
マイクロ化経費	3億円
史料補修費	5千万円
撮影稼働日数	520日 3,640時間
撮影延稼働人数	10,400人(20人×520日)
補修史料点数	2,958点(裏打ち2,694点 分冊・綴変え264点)
撮影史料点数	65,476点
マイクロ仕様	16mmマイクロフィルム 銀塩フィルム アーカイバル処理 自動検索機能付
カメラ台数	4台(池田家文庫撮影用特別ブックホルダー装着)
完成フィルム	2,486リール 1,866,507コマ 145,238フィート 41km
頒布価格	1リール 3万円 総価格7,458万円
検索目録	池田家文庫マイクロ版史料目録(リールガイド版) 改訂増補 池田家文庫マイクロ版史料目録

製品分野別データ

期	分	野	撮影点数	リール数	撮影コマ数	フィート数	改訂増補版	リールガイド版
第1期	総記	A	1,991	248	234,866	17,610	1冊	
	国事	S	8,363	126	118,137	8,866	1冊	
	法制	E	2,374	64	57,972	4,373	1冊	1冊
	行政	F	3,737	50	40,045	3,071		1冊
第2期	領地	B	834	27	16,621	1,328		1冊
	藩士	D	8,642	556	383,024	30,066	1冊	
	宗教	P	1,424	67	42,434	3,379	(含伊木家)	1冊
第3期	財政	G	3,302	116	77,414	6,229		1冊
	産業	K	683	22	12,588	1,114		1冊
	社会	L	758	24	13,853	1,194		1冊
	教育・文化	R	3,578	91	59,841	4,816		1冊
	土木・建築	M	735	37	25,303	2,002		1冊
	交通・通信	N	603	27	13,518	1,325		1冊
	軍事	H	4,358	82	54,119	4,323		1冊
第4期	藩侯	C	19,047	784	567,831	44,300		1冊
	その他	W	803	43	39,186	2,955		1冊
	支藩・家老家 岡山神社		4,244	122	109,755	8,287		1冊
	合計		65,476	2,486	1,866,507	145,238		

補修

池田家文書の修補を終えて

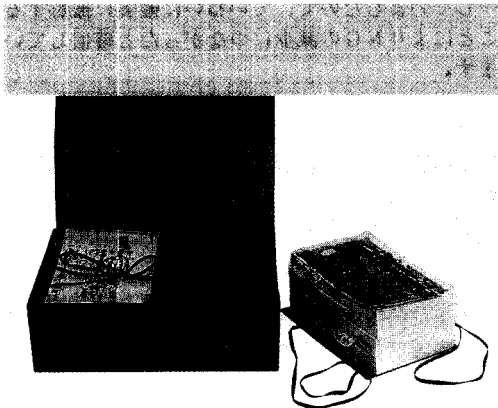
木原 郁 木原克尚 木原健雄
株式会社 ヤマキ

「何これ！水濡れで固まってるやん」「うわあ ぼろぼろ」

虫食いや破損で読むのが困難な史料を修補するのが私たちの仕事とはいっても、池田家文書は想像をかなり上回るほどひどく状態の悪いものでした。1冊が千枚以上もある部厚い史料があったり書状類も水濡れでしっかりひっついてるし、綴じ方もさまざまでした。その上、マイクロ撮りとの歩調もあって、ゆっくりと時間もかけていられませんでした。私は内心「すごい仕事きたなあ」と少々怯んでいました。しかし、父である社長が何度も足を運び手にした注文です。報いるためにも頑張らなければ、「ヤマキに出して良かった」と言ってもらえるようにいい仕事をしなければ、そんな思いも巡っていました。

それにしても破損がひどい。裏打ち出来る状態にまでなかなかいかないのです。1日かけても10枚も開けない時があるのですから。時間ばかり過ぎて思うように進まない。毎日毎日遅くまで残業が続く。「ああ もっと時間がほしい！」。

こういう仕事は全て手作業で特殊ですので、パートタイムで働いてくれる人を募集してもなかなか来てくれません。やっと来てくれたとしても、すぐに慣れて生産力がアップするということではなく、その間は手を取られることのほうが多くなります。同じ作業の繰り返しとはいえ1冊1冊、1枚1枚性質が違うのです。常に新しく試みる史料なのです。仕事中はいつも気が張りっぱなしでした。



社長が納品に行き帰ってくるのが楽しみでした。「どうでした?」「喜んでくれてたよ」、その一言がうれしくてまた次への励みになっていました。いつからか古文書に関する責任を私が持つようになり、ますますいい仕事をしなければという気持ちになっていました。しかし、ヤマキにはもちろん池田家文書のマイクロ化に関係している人々に迷惑をかけてしまったことも多かったと思います。この仕事をして、自分一人のミスがどれだけ多くの人の手を止めてしまうか、全体の流れを乱してしまうか、また、仕事を任されて責任を持ってやっていくことがどれだけ重要で難しいことなのかということも、身をもって感じる事ができました。

最初から最後まで池田家文書のマイクロ化のための修補を何とか無事にやり通すことができて、私はすごくいい勉強ができたと思います。何種類もの破損度の違う史料を見て、幾通りもの修補の仕方も覚え、皆で知恵を出し合い新しく発見したことも多くありました。何よりもこの大きな企画に携われたことは、ヤマキにとっても私自身にとっても励みとなり、また自信へとつながっていくと思います。一つの事をやり終えた今、充実感でいっぱいです(郁)。

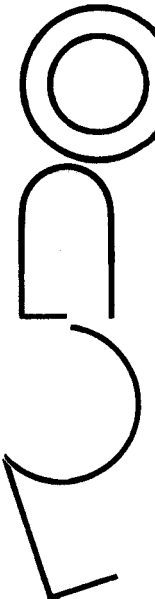
私は、職人としてまだまだ半人前です。そうした中で今回のような大切な仕事に関係出来ましたこと、心からありがたく思っております(克尚)

3年間の仕事をとおして種々な意味で随分と勉強をさせていただきました。作業の終わりました今、本当に感謝しております。

お預かり文書の保管管理、作業工程など、試行錯誤の中で、家族と一緒に働いてくれた人々との連帯感を深める事が出来、また若い人々の私がつけていた固定観念を破る新しい発想や想像以上の責任感に助けられました(健雄)。

全裏打補修の極厚史料(分冊、改装)とその収納のためヤマキが考案作成した文書箱

補修は取扱い要領を定め、可能な限り原形の復元をする努力をしましたが、元の形状に戻すとかえって史料が痛む心配のある場合は、分冊・縦変えなどの改装を行い、補修記録と写真記録を作成しました。今回、補修に使用した和紙は、手漉楮紙3匁約5万枚(全紙)、当て紙(捨紙)約16万枚(ほぼA3判)です。(写真提供 小野博)



撮 影

和紙からフィルムへの変換

小 野 博
コンパニオンセンター現場責任者

平成2年4月、マイクロ化の事前調査が始まったとき、整然と配架されている池田家文庫の史料群に武者震いしたことを今でも記憶しています。

通常、私たちの業界ではマイクロフィルム撮影という言葉を使います。しかし、本事業は撮影ではなく、コンバージョン、つまり「和紙からフィルムへの変換」という言葉を業界史上初めて使いました。この言葉の違いは立体から平面への変換をも意味し、文字情報だけでなく、その史料が語りかけてくるその他の情報をも可能な限り利用者にお伝えできるよう努力工夫を重ねました。

特に、原史料の形態の特徴を、いかに変換して伝えるかが大きな課題の一つでした。

そのために、撮影に先立ち原史料の調査作業を実施し、撮影準備作業（間紙入れ、皺伸ばし、ラベル付与など）、付箋、掛け紙、極厚資料、外装（外箱、帙など）について、取扱い及び撮影要領を細かく決めました。また多種多様な形態に対応するため、新しい形態がでると、研究者、図書館担当者、プロジェクトで構成されるワーキンググループに図り協議しました。

変換の方法だけでなくフィルムの品質においても高度な技術管理を行っております。例えば、一紙文書の継紙形態の糊付け部分は、通常、切り紙の左端部分を上にしますが、誓紙はそれが逆になっています。この微細な箇所もフィルム上で確認することができます。それでも表現不能な場合はフィルム上でコメントを撮影し説明する方法を選びました。特に、不審紙、付箋、掛紙、押紙の区別は、専門用語の表現にも苦慮しました。

特大史料については別途撮影により縮小版を作成し、まず縮小版に史料寸法を添えて撮影し、続いて原史料を分割撮影しました。このことにより利用者は全体像とともに、必要な部分の情報をも読み取ることができるようにするためです。

また、特殊な形態の史料としては礼紙書、施風葉、粘蝶装などがあり、これらも利用者が想定しやすいように変換を工夫した上にコメントを挿入しました。

かけがえのない貴重史料を永遠に保存することができるよう感謝の気持ちを込めてマイクロフィルムへの変換事業が行えたことは、私の一生の誇りとするところです。

立体イメージのむずかしさ

松 山 謙 二
コンパニオンセンター オペレーター

2年半にわたる長期間、約187万コマもの撮影量に耐えてくれたフジフィルム製 FMAC600D-K（岡山県にちなんで、桃太郎、キジ、サル、犬号機と命名）4台は、古文書撮影専用カメラとして威力を発揮してくれました。

使用されている専用ブックホルダーの大きな特徴としてあげられるのは、約8cmまでの背厚の史料が、見開きの状態で常にガラス面と水平に保持するよう設計されており、史料を押さえるガラス面の圧力についても、人的に軽く押さえた程度に配慮されている点です。

次に撮影面での一番苦労した点は、やはり立体的な史料形態をマイクロフィルムという平面にいかにか表現できるかについてでした。利用者の立場に立って仕上がりをチェックするシュミレーションも何度も行いました。例えば書状の折り目が若干表現できる濃度に仕上げるとか、冊子の中の複雑な掛紙類の撮影順序のチェック、リーダープリンターで再現する際、判読性の良い撮影縮率に設定する、撮影時の史料のプレースメントが正確になされているか等々、史料や仕上がりについて思いやりが込められているかをも重視しました。

その他にも4人の撮影者が同じ撮影方法、同じ仕上がりになるよう何回もミーティングを繰り返しました。ミーティング内容を文書化しても理解しがたい場合は、各自ノートに絵の状態で記録しました。また、フィルムの仕上がり濃度管理も統一していましたので、ていねいに確実に撮影することによりNGの減少につながったと確信しています。

平成の大事業となった池田家文庫マイクロ化の撮影は終了しましたが、もし今後古文書の撮影の機会が与えられるならば、2年半の間に培われた経験と実績を生かした評価される仕事になるよう取り組みたいと思っています。

最後に岡山大学の皆様をはじめ、関係各社、各位に感謝申し上げます。

親番一括のこと

高旗克義
コンバージョンセンター作業員

今回の池田家文庫のマイクロ化で、私の最も印象に残っているのは「親番一括」です。

この名称は、コンバージョンセンターで名づけたもので、本来一件文書である史料が、分類のため分散されている状態のものを、原秩序に復元して撮影する作業のことです。

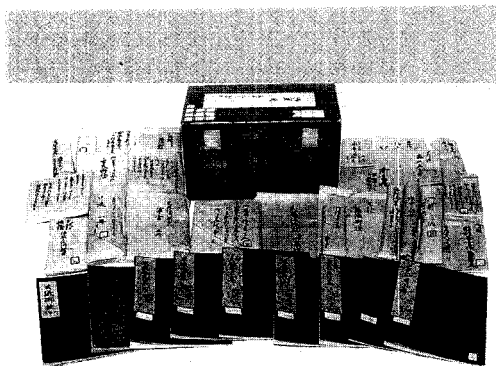
マイクロ化の当初の予定では、現在の状態のままで撮影することになっていました。

それは、池田家文庫の史料状態が大変良く整理されていることを前提とした方針でした。

ところが、実際作業に入ると、補修を必要とするものや、ラベルが付与されていないもの、分類が誤っているものなどがたくさん見られ、これらを追求していくにつれて、全く予想もしなかった親番一括の問題が浮かび上がってきました。

これにより、当初の作業内容が大幅に変更され、史料の再整理を余儀なくされることになりました。作業はより複雑、困難になりましたが、このことが、史料の理解を深め、また興味を持ち始めるきっかけとなりました。

実際の親番一括の作業は、明治期に池田家が家史編纂事業として、史料整理を行い作成していた台帳の「国史目録」が残っていたことにより、ほとんどの史料について復元することができました。その件数は、全体で252件に及びました。



しかし、国史目録に記載されている一件文書の記録を、『池田家文庫総目録』から探しだすのは、非常に困難なことでした。

というのは、一件文書の史料の内容が多分野に渡り、分散されていることや、『総目録』上のラベル番号の重複及び原史料と目録の標題の異なるものなど誤植も多く、時間的制約により史料の調査が十分にできないからです。

また最初のころは配架にもなれず、史料の保管場所についても知識があまりなかったこともあります。

どこまで追求し復元するかが、最後まで私の課題となりました。

しかし、一応完遂することができ非常にうれしく思っています。

その要因は、書庫の中の史料の位置を把握し、史料の管理を徹底したからであり、また、史料の内容を積極的に理解し、古文書についての知識を得ることができたからだと思います。

このように、親番一括の作業は、大変困難でしたが、今回のプロジェクトに与えた影響もまた大きいものがありました。

何よりも、この作業をとおして、史料の性格や分類を理解することにより、私たち自身が専門職意識を自覚し、チームの連帯感を一層強めることにもなったので、プロジェクトの意義をだれもが感じることができたのではないかと思います。

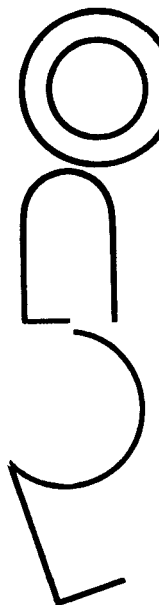
最後に、今回のマイクロ化の仕事に終始携わることができたことを感謝するとともに、お世話になった方々に厚くお礼申し上げます。

「親番一括」作業で復元された一件文書の例

漆蒔絵入箱の蓋には、「御軍用 薄田より差上ル書付類」と記された付箋が張られ、貝太鼓奉行薄田兵右衛門から献上されたものであることが知られます。

目録書があり、「国史目録」と照合して復元すると、天和3年の武家諸法度など25件の史料から構成されており、原史料には朱書の一連番号が付されていました。『総目録』では箱から分離され10の分類項目に分散して整理されています。マイクロフィルム上では、主要な分類の箇所、容器、容器の文字情報、目録、そして目録の順に中身の史料を撮影して一件文書の原形を復元し、それぞれの分類の箇所でも容器とともに史料を撮影しています。

(写真提供 小野 博)



目録と活用

私にとっての『池田家文庫』

—『池田家文庫』のマイクロ化によせて—

藤井譲治

京都大学人文科学研究所助教授

私の経験からすれば、『池田家文庫』は利用の便が最もよい機関の一つである。それは、レファレンスや出納をしてくださる人の専門性と史料の保存・配架の良さとによっている。

今回、『池田家文庫』の藩政史料がマイクロフィルム化されることになった。このマイクロ化は多くの点で重要な意味をもっている。まず第一は史料が身近なものとなり、その利用が極めて容易となることである。

マイクロ化の持つ意味の第二は、頻繁な利用による史料の劣化を防止することである。こうした試みは、国立公文書館などでも一部行われているが、膨大な藩政史料群のほぼ全てを対象とした試みはまだまだなされていない。

第三は、マイクロ化の直接の成果とはいえないが、マイクロ化を契機にこれまで虫損・水濡れなどによって閲覧できなかった史料が補修され、史料の一層の保存と利用が図られたことである。他の多くの藩政史料においては、なかなかそこまで手が回らないのが現状のようである。

第四は、これまで利用されてきた『池田家文庫総目録』がマイクロ化による利用の便を考え新たに作成されたことである。このマイクロ版の目録作成に当たって、『池田家文庫総目録』では十分でなかった史料の作成年次、作成主体などが明らかにされ、これまで混乱していた史料の原秩序の復元にも努力が払われている。またその解題では『池田家文庫総目録』の分類の変更が銘記され、さらに現状で不明な点や問題点についても言及され、利用するものだけでなく将来の史料整理への配慮がなされている。

マイクロ化による利用の拡大、史料の劣化の防止、マイクロ化を契機とした史料の補修や書誌的研究の深化は、それ自体が学会にとって大きな財産である。と同時に、将来他の藩政史料でこうした同様の試みがなされる時、『池田家文庫』のマイクロ化とマイクロ版目録の作成は、『池田家文庫総目録』がかつて他の藩政史料の目録作成にあたって果たしたのと同様に、指針的な役割を担うものとなるであろう。

『学燈』 vol.90 No.2 1993.2より



池田家文庫マイクロ出版 —セルフサービスを実現—

原史料のマイクロフォームへのメディア変換により、利用形態も変革されつつあります。池田家文庫マイクロ版集成の16mmマイクロフィルムには自動検索システムがセットされています。ユーザはマイクロ版史料目録で該当史料のフィルムアドレスを検索し、リーダープリンタに該当のフィルムカートリッジをセットして、操作パネルにコマ番号をキーインすると、即座に該当史料がスクリーン上に投影されます。複写サービスも容易になり、該当箇所を瞬時にコピーアウトできるほか、連続コピー、部分拡大なども可能です。フィルムに対応させたマイクロ版史料目録は、「総目録」を基本データにした分野別のリールガイド版のほかに、総記、国事維新、藩士、法制、行政の分野については、改訂増補版が刊行されます。(写真提供 小野 博)

『改訂増補 池田家文庫マイクロ版史料目録』 の刊行によせて

倉地克直

岡山大学文学部助教授

池田家文庫の岡山藩政史料が、単に藩政史にとどまらず近世社会の各分野にわたる研究にとって貴重な史料であることは、衆目の一致するところでは、その全史料がマイクロ化されることは、近世史研究の発展に大きく寄与するものであるとともに、史料保存の上でも重要な試みです。

近世史料のマイクロ化は、これまでも冊子体のものを中心にいくつか実施されてきましたが、多数の一紙文書を含み、形態も内容も異なるこれほど膨大な史料群全体を一挙にマイクロ化する事業は、まさに画期的なものであると言えます。

このマイクロ版の完成にあわせて、『改訂増補池田家文庫マイクロ版史料目録』が作成され、この度「A総記」と「S国事維新」の部が丸善から発売されました。これはマイクロ版を利用するための目録ですから、当然一点一点にマイクロフィルムのリールNo.とコマNo.が付されているわけですが、それにとどまらず、これまで利用されてきた『池田家文庫総目録』（岡山大学附属図書館、1970年、非売品）に大幅な改訂増補が加えられており、独立して利用する史料目録としても十分価値あるものとなっています。

マイクロ化の作業は、撮影の過程で一点一点の史料を吟味し、目録との照合を行わなければならないわけですから、その作業を通じて、従来の『総目録』の不備が色々と浮かび上がって来たものと思われるます。

『総目録』自体は、当時の状況においては関係者による最善の努力の賜物であり、これまでの多くの研究者によって便利に利用されて来たものではありますが、他方、使用した経験のある人々の間では、分類整理の不統一や記述の簡略さ等についての不満も聞かれていました。

しかし、撮影とは別に目録改訂作業を行うことは多大な労力と費用を要することであり、マイクロ化という世紀の大事業に際して、併せて目録の改訂増補を刊行された関係各位の見識と努力とに深い敬意を表したいと思います。

『改訂増補目録』の「解説」によれば、その改善のポイントは、次の4点であるとのこと。

- ①書誌的事項の記述を見直してより精度の高いものにする。

- ②年次情報は歴史史料にとって最も重要な要素であるので、作成年次及び内容年次をできる限り明確にしていること。

- ③体系的な編纂物や一件文書はその原秩序を復元していること。

- ④将来電子化も可能となるように、標題をはじめ各書誌的事項について標準的な記述を図ることを課題としたこと。

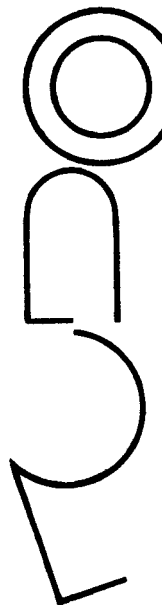
目録を一見して気付くことは、記述の詳細と正確さです。今回の目録では、「凡例」にみられるような厳密で統一的な基準にもとづいて一貫した作業が行われており、『総目録』段階では十分な整理が行われていなかった「S国事維新」の部などでは、その面目を一新したと言っても過言ではありません。

また、『改訂増補目録』で興味深いのは、原秩序復元の努力が行われていることです。池田家文庫の史料には、表紙や端裏に朱書の付箋が付けられているものが多くあります。これは、明治20年前後に行われた池田家での家史編纂に際して付けられたもので、朱書の記号・番号はそのとき作成された史料台帳である「国史目録」1～6に整理され登録されたものでした。この「国史目録」によって池田家での史料の保管場所及び作成部局を知ることができます（詳しくは『改訂増補目録』の「解説」を参照して下さい）。

従来の『総目録』は内容分類を主としたものであったために、この点が重視されず、一件文書が分散して整理されるというような場合もありました。今回の『改訂増補目録』では、この「池田家旧棚分類」が全て記載されており、これによって「国史目録」にもとづく原秩序復元の手掛りが得られることになりました。藩政文書の系統や作成過程を知る上で重要な試みであると言えるでしょう。

史料目録の作成・刊行という作業は地味で報われることの少ない仕事ですが、史料の保存・公開や研究の発展のためには欠かすことのできないものです。この『改訂増補池田家文庫マイクロ版史料目録』が多くの人々に利用されるとともに、引き続き刊行を期待したいと思います。

『岡山地方史研究』 68号 1992.5より





池田家文庫マイクロ化事業遂に完成

— 4月14日記者発表を予定 —

平成2年8月末にスタートしたマイクロ化事業は、2年4ヵ月をかけて平成4年12月22日、撮影を完了しました。池田家文庫藩政史料マイクロ版集成として撮影された史料は約6万5,500件、撮影のため補修した史料は約2,960点、製品の16mmマイクロフィルムは、第1期488・第2期650・第3期399・第4期949、合計2,486リールです。平成3年2月28日～平成5年3月11日までに丸善からマスターフィルムとポジフィルム各一式を受贈し利用に供しています。

附属図書館における直接利用サービスの受付窓口は2階の参考調査係（内線7323）です。郵送による全ページ複写も受付けています。複写のお申し込みは相互利用係（内線7325）まで。

改訂増補マイクロ版史料目録の刊行

平成2年度に丸善、富士写真フィルム株式会社の協力を得て、『池田家文庫総目録』の改訂増補作業がスタートしましたが、現在次のような刊行状況で、いずれも丸善から発売されています。

総記	19,335p	A4判	9,600円	'92.1
国事維新	30,481p	A4判	11,000円	'92.3
藩士	1	(準備中、'93.5 刊行予定)		
2	10,599p	A4判	17,000円	'93.3
3	10,427p	A4判	11,000円	'93.3
4	10,447p	A4判	11,000円	'93.3

また、その他の分野については、『池田家文庫総目録』のデータにマイクロアドレスを付与したマイクロ版史料目録が分野別に刊行されています。

池田隆政氏から留帳寄贈

戦前、池田家より旧文部省官房史料編集課へ貸し出され、戦後東大史料編纂所へ引き継がれていた留帳（弘化4年、安政元年の3冊）が、昭和48年池田家へ返却されていましたが、この度岡山日々新聞社専務取締役原田克也氏のご尽力で、附属図書館に寄贈され、池田家文庫に収納されました。これにより岡山藩政の基幹史料である留帳が完全に揃うことになり、上記マイクロ版集成の補遺の部に収録されました。

AVインフォメーションチームより

図書館利用案内システムの愛称

— 募集により「オリーブ」と命名 —

「楳」No.16のマスカット欄でご紹介しましたように、中央館では、利用者案内のシステム化計画の一環として、図書館職員により開発したマッキントッシュによる利用案内を平成4年9月11日から、1階フロアで公開してきました。

利用者の方から愛称を募集していましたが、その中から、「オリーブ」を採用させていただきました。

オリーブはメニュー選択方式

— 20種類のメニューに成長 —

公開当時は約15分間の基本的な図書館案内情報を日本語と英語でエンドレス方式で提供していました。その後も、メニューの充実をめざして開発を継続、昨年暮にクリスマスバージョンとして公開した主なメニューは、次のようです。

Library Guide（日本語、英語、音声入り）、開館日・開館時間ほか、各階案内（日本語、英語、中国語）、図書の貸出し、コピーをとるには、新聞の所蔵状況と場所、近世文書、個人文庫、新着図書案内、他の図書館案内、学外の方へ、図書館からのお知らせ、ライブラリーフレッシュ

OPAC、目録カードの利用の仕方

— マック増設により、ただいま開発中 —

今年度も引き続き学内の理解を得て、マッキントッシュの増設が実現でき、新しいソフトも追加されました。そこで、一層の充実をめざし、4月から2階のレファレンスフロアに1台を備え、OPAC、カード目録の利用の仕方について、ユーザが目録利用技術を自習できるように3月末の完成をめざして新しいプログラムを開発中です。

また、来年度はこのホットなメニューをオリエンテーションにおけるプレゼンテーションツールとして活用することを企画しています。

今後とも、新しい可能性を探っていきたく思っています。利用者の方々のご支援をお願いいたします。

図書館利用案内システム 研究集会で発表

平成4年10月28日～30日、山口で行われた中国四国大学図書館研究集会で、附属図書館で開発中の図書館利用案内システムについて、飯塚（旧姓小林）雅代参考調査係員が研究発表を行い、参加者の関心を集めました。

留学生のためのAV資料を充実

—欲しいAV専用ブース—

中央館では、この度、対談21世紀、日本解剖、映像でつづる昭和の記録、日本への旅など、留学生の日本文化理解の支援となるものを中心に、ビデオソフト20タイトル、271巻（テキスト付）を購入しました。現在、3階フロアにビデオコーナーを設けていますが、本格的な専用ブースの設置が望まれます。なお、館外貸出をいたします。

STN化学分野入門研修会開催

平成5年1月25日附属図書館において、化学分野の情報検索システムの入門研修会を開催し、専門教官や大学院生30数名が参加しました。

「楳」№.16に掲載のように、中央館では現在、国内外のデータベースについて代行検索サービスを実施していますが、化学分野は利用全体の3分の1を占めています。ところがこの分野は使用料金も高額、かつ高度の専門知識を必要とし、人手不足、研修費不足に悩む図書館ではサーチャーの養成に苦慮しています。そこで、学内のユーザに実情を訴え、この分野の研究・教育支援のために利用者自身のダイレクト検索に対し大幅な大学割引制度を適用しているSTNを紹介したものです。幸いユーザのご理解を得て、ダイレクト検索に向けて努力をしていただくことになりました。

鹿田分館だより

第28回日本医学図書館協会中国四国部会 総会開催

平成4年11月5～6日の両日、岡山県青年館において開催され鹿田分館が当番校を勤めました。正式会員11館のほか、オブザーバーとして病院図書室（6）からの参加があり、熱心な協議が行われました。雑誌の値上がりや資料費を圧迫し深刻な問題となっているおりから、外国雑誌の購読見直しや有利な契約方法が話題になりました。

MEDLINE用CD-ROM 装置の増設

「楳」№.16号で紹介しましたように、CD-ROM 用パソコンと周辺機器が増設されて2セットになり、11月24日から利用サービスに供されています。これに伴いソフトも最近6年分が追加購入され、利用の緩和が図られました。新しい検索マニュアルも作成されて利用者に喜ばれています。

医学関係ビデオソフトを購入

「目でみる身体のおもしろさ」全14巻など全4タイトル33巻のビデオソフトが入荷しました。これは昨年秋から選定していたもので、2月から利用に供しています。館内での視聴も館外貸出しも可能です。

資生研分館だより

貴重書文庫の利用と保存の試み

—日米セミナーへの参加—

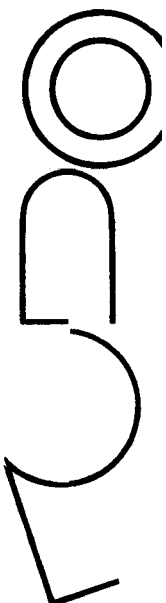
当分館は、蔵書冊数15万冊を持ち、3つの貴重書文庫を所蔵する農学・生物学分野の専門図書館です。大正10年(1922)に創設され、日本で唯一の民間における農業研究所でしたが、戦後、岡山大学へ移管されました。

貴重書文庫は、研究所創設期に大原孫三郎氏（大原美術館も設立）によって収集されたもので、「ペッファール文庫」「大原漢籍文庫」「大原農書文庫」あわせて約2万冊から成っています。また19世紀ヨーロッパで創刊された理学関係の学術雑誌や米国各州立大学・農務省関係の出版物等、貴重なコレクションを所蔵しています。

平成4年5月、倉敷で国際シンポジウム「ペッファール文庫」所蔵の「Pflanzenphysiologie」の復刻記念が開催されました。あわせてドイツ19世紀後半植物生理学の記念碑的主著を中心とした貴重書展を行い、大変好評でした。これを契機に本格的に貴重書文庫の利用と保存の計画の策定に着手することになりました。

この計画の骨子は、新しい時代に添う貴重書利用の可能性を追求することによって、広く国内外の学術研究に貢献しようという意図したものです。

平成4年10月12日、京都で日米ワンデイセミナー（第13回大学図書館研究集会）が開催され、日米の数々の課題について将来への展望が報告されました。その第6セッションで脇本篤子係長が資生研分館の貴重書文庫の長期計画を紹介し、有益な助言をいただく機会を得ました。



会議

〇〇

◆ 学 外

- 11.5~11.6 第28回日本医学図書館協会中国四国部会 (於岡山大学)
- 11.12 学術雑誌総合目録欧文編全国調査実施およびデータ記入説明会 (於京都大学)
- 12.3~12.4 平成4年度国立大学附属図書館事務部長会議 (於那覇市)
- 3.19 「医学図書館」中国四国地区特集編集会議 (於岡山大学)

◆ 学 内

- 10.23 第2回附属図書館電算機仕様策定委員会
・図書館専用電算機の更新について
- 11.4 第1回附属図書館資料選択委員会
・図書館資料選択計画について
- 11.27 第3回池田家文庫マイクロ化実務打合わせ会
・「D藩士」分野の改訂増補版目録について
- 12.9 第2回附属図書館資料選択委員会
・図書館資料の選択について
- 12.17 第5回附属図書館広報委員会
・英文利用案内改訂版の発行について
・館報「楮」No.17の編集について、その他

- 12.18 第3回附属図書館運営委員会
・平成6年度概算要求事項について
・平成6年度国立学校施設整備費概算要求事項について
・定員削減に伴う配本体制について
- 1.20 第3回附属図書館電算機仕様策定委員会
・システム機能と仕様(案)について
- 1.21 第6回附属図書館広報委員会
・英文利用案内改訂版の発行について
- 2.4 第7回附属図書館広報委員会
・英文利用案内改訂版の発行について
- 2.5 配本体制の変更に伴う事務打ち合わせ
- 2.8 池田家文庫特殊文庫委員会
・池田家文庫マイクロ化事業について
- 3.8 第3回附属図書館資料選択委員会
・図書館資料の選択について
- 3.16 第4回附属図書館運営委員会
・附属図書館事務用電子計算機利用要項(案)について
- 3.19 第4回附属図書館電算機仕様策定委員会
・提供資料に基づく仕様書(案)について

研修

〇〇

- ・日米ワンデイセミナー(第13回大学図書館研究集会)
参加者 脇本篤子 (10.12)
- ・平成4年度国立学校等幹部職員研修(部長級)
参加者 森岡祐二 (11.8~11.11)

- ・第10回中国地区管理者研究会
参加者 山中康行 (11.16~11.20)

編集委から

〇〇

平成2年8月に開始された「池田家文庫マイクロ化事業」は2年4ヵ月で撮影を終了しました。その間に館長・事務部長・情報サービス課長の異動があり月日の経過を感じられずにはられません。かかわった人達はそれぞれの場で与えられた役割を地道に果たすことによって「マイクロ化事業」が完成し、また「平成の大整理」という史料の悉皆調査を敢行して、「改訂増補 池田家文庫マイクロ版史料目録」を作成するという、この種の作業では稀有な事業を行えたことは、図書館職員と史料とのかわりを示す好例として永く残ることでしょう。岡大図書館が先駆けをはたしましたが、この事業を通じて育てられた、古文書の整理技術・保存方法・取扱いの技術・補修技術等は、今後地元岡山の郷土史料保存にも大きな影響を与えることと思います。

事業は終わりましたが、何かが始まったことは疑いもない事実です。マイクロ化事業は何を問かけたのか、もう一度反芻したいと思います。

(情報サービス課長 山中康行)

本号は、池田家文庫マイクロ化事業完成記念特集号としました。清水國夫先生の斬新なデザインをお味わいください。

私もマイクロ化の図書館実務担当者として、この3年間プロジェクトに加わりました。編集を終えた今、改めて壮大な「夢の実現」をかみしめています。そして、江戸期以来、連綿として幾多の人々の情熱をかきたてながら伝存されてきた池田家文庫の歴史に思いをはずすにはられません。

文庫に飛躍的な発展をもたらしたエポックとしては、維新时期まで継続された岡山藩留方の記録保存活動、明治期の池田家家史編纂事業、戦後岡山大学の『池田家文庫総目録』の作成、そしてこの度のマイクロ化事業があげられましょう。今回も事業にかかわった人々のロマンや葛藤がさまざまな人間ドラマを生み、池田家文庫は21世紀に向けて装いを新たにしました。今後、文庫にはどのような歴史の展開が待っているのでしょうか。それは大河の流れに似て、絶えることなく未来に受け継がれていくにちがいません。(中野美智子)

岡山大学附属図書館報「楮」 No.17 平成5年3月31日
発行人 森岡祐二 編集 広報委員会 表紙デザイン・レイアウト 清水國夫
岡山大学附属図書館発行 〒700 岡山市津島中3丁目1-1 電話086-252-1111